

群馬県 御中

分析レポート

あなたが思う、2040年の群馬県が目指すべき姿を教えてください！



2026年3月12日



意見募集の概要・実施結果

- **調査方法**：デジタルツール「PoliPoli Gov」を用いたインターネットリサーチ
- **意見募集のテーマ**
 - あなたが思う、2040年の群馬県が目指すべき姿を教えてください！
- **調査期間**：2025/10/16～2025/11/23
- **調査地域**：全国オンライン
- **ページ閲覧数**：1,054PV
- **総コメントユーザー数**：112人 (*ユーザーIDの重複を削除した値より、ユニークユーザー(UU)数を算出)
- **総コメント投稿数**：127件 (*コメント公開基準に抵触する非公開コメントを除外した値を算出)
- **回答者の属性（必須回答）**：
 - あなたと群馬県の関わり
 - あなたの年代
 - あなたの性別
 - あなたは新・群馬県総合計画を知っていますか？

意見募集の仕組み



※プラットフォーム内のコミュニティを健全に保つため、投稿されたコメントが攻撃的な内容や広告目的と判断された場合に、運営側でコメントを非公開としています。



意見募集の概要・実施結果 | 全コメントにおけるユーザー属性

群馬県の関わり

群馬を訪れたことはない

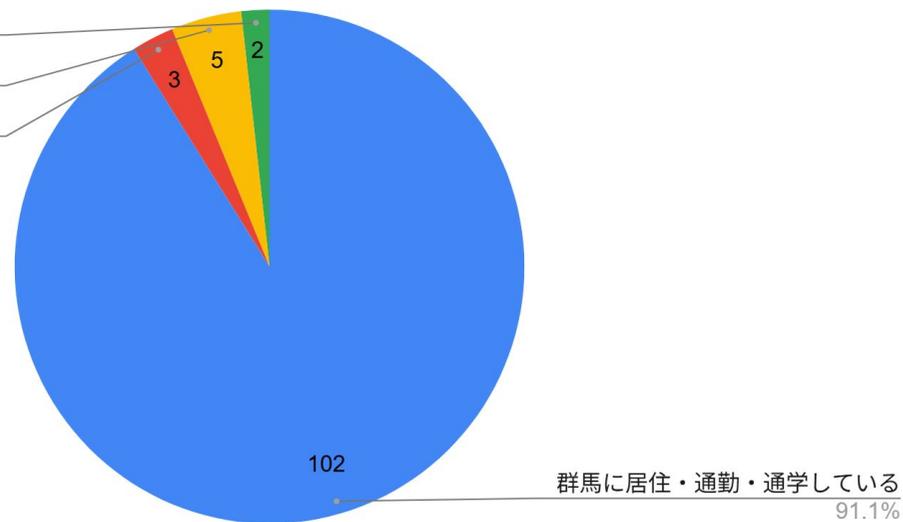
1.8%

過去、群馬に居住・通勤/通学した

4.5%

観光などで群馬を訪れた

2.7%



年代

70代以上

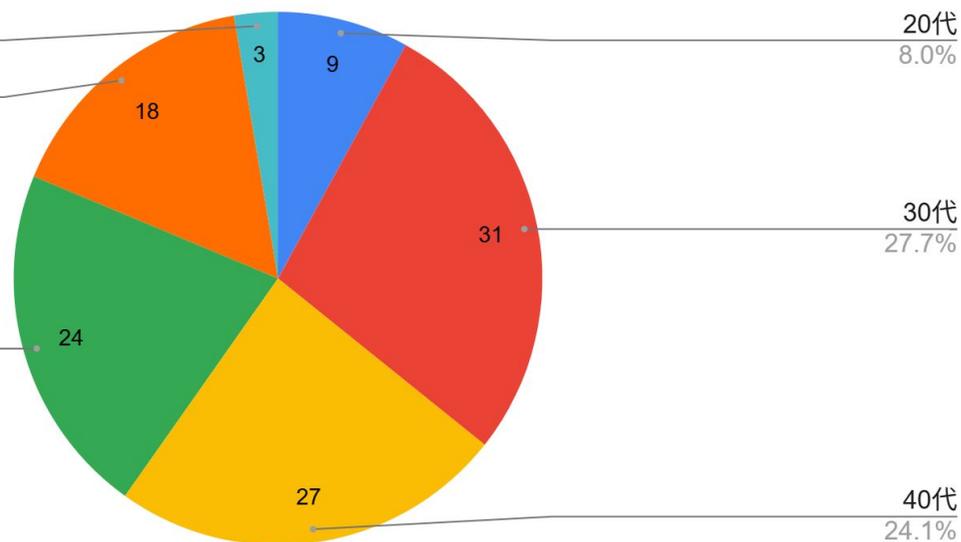
2.7%

60代

16.1%

50代

21.4%

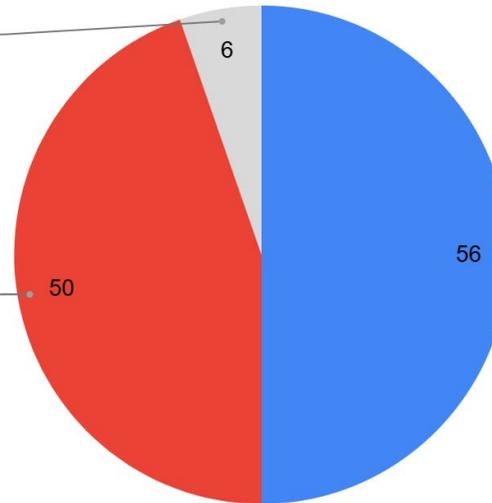


意見募集の概要・実施結果 | 全コメントにおけるユーザー属性

性別

回答しない
5.4%

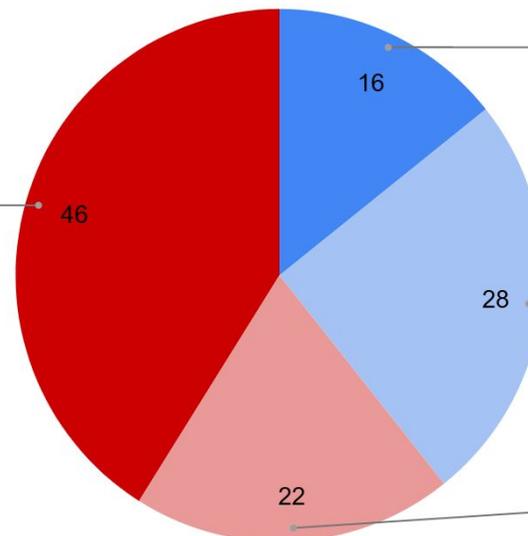
女性
44.6%



男性
50.0%

新・群馬県総合計画の認知度

全く知らない
41.1%



知っている
14.3%

少し知っている
25.0%

あまり知らない
19.6%

カテゴリごとの分析 | コメントを5つのカテゴリに分類

県民の声から導き出した「5つの政策アップデート領域」

1. 秩序ある共生(多文化共生・治安)
2. 移動の柔軟性(交通・インフラ)
3. 若者定着・生活の質(子育て・魅力・働き方)
4. 県民対話・広報(計画へのフィードバック・認知)
5. 生活防衛・基盤強化(地域格差・防災・経済)

カテゴリごとの分析 | コメントを5つのカテゴリに分類

カテゴリ	コメント概要
<p>1. 秩序ある共生 (多文化共生・治安)</p>	<p>キーワード: 生活ルールの徹底、治安維持、厳格な法運用、公平性、ガバナンス強化、相互理解</p> <p>概要: 「治安が悪化している」「ゴミ出し等のルールが守られていない」といった生活環境への不安や、税・社会保障における不公平感を訴える声が多く寄せられています。単なる受入拡大ではなく、地域社会の秩序を守るための「規律」と、日本人も外国人も等しくルールを守る「公平性」が強く求められています。</p> <p>アップデートの方向性 多文化共生の前提として、生活ルールや法令遵守の徹底を最優先事項と位置づける。違反時の対応や審査の厳格化を可視化し、県民の不安と不公平感を払拭することで、納得感のある共生社会を目指す。</p>
<p>2. 移動の柔軟性 (交通・インフラ)</p>	<p>キーワード: 道路メンテナンス、免許返納、移動のセーフティネット MaaS、地域公共交通、除草・補修</p> <p>概要: 「道路の白線が見えない」「草刈りが不十分」といった現状の車社会を支えるインフラ維持への要望と、「免許返納後の生活が想像できない」という将来への不安が混在しています。観光地としての景観維持の観点からも、道路環境の質的向上と、高齢者や学生が取り残されないための移動手段の確保が急務とされています。</p> <p>アップデートの方向性 短期的には道路インフラの徹底的な維持管理を行い、中長期的にはライドシェアやオンデマンドバス等、自家用車に頼らない移動手段を社会実装する。誰もが移動を諦めなくて済む「移動の柔軟性」を保障する。</p>

カテゴリごとの分析 | コメントを5つのカテゴリに分類

カテゴリ	コメント概要
<p>3. 若者定着・生活の質 (子育て・魅力・働き方)</p>	<p>キーワード: デートスポット、都市アメニティ、情緒的価値、多様な働き方、子育ての余白、クリエイティブ</p> <p>概要: 若者が県外流出する要因として「遊ぶ場所・デートする場所がない」「魅力的な仕事(事務・クリエイティブ等)が少ない」という点が指摘されています。機能的な便利さだけでなく、「楽しさ」「心地よさ」といった情緒的な価値や、金銭面だけでない精神的な子育てのゆとりを求める声が顕著です。</p> <p>アップデートの方向性 若者が滞在・消費したくなる商業施設やレジャースポット等の「都市アメニティ」を拡充する。また、副業やリモートワークを含めた多様な働き方を許容し、若者が「群馬で暮らす理由」を直感的に感じられる街づくりを進める。</p>
<p>4. 県民対話・広報(計画への フィードバック・認知)</p>	<p>キーワード: 政策翻訳、自分事化、分かりやすい言葉、双方向コミュニケーション、認知拡大、ベネフィット</p> <p>概要: 「計画自体を知らない」「横文字や造語(始動人・快疎など)が響かない」といった厳しい指摘が見られます。行政独自の概念よりも、それが自分の生活にどう役立つのかという「実利」や「具体像」を知りたいというニーズが高く、無関心層に情報を届けるための工夫不足が浮き彫りになっています。</p> <p>アップデートの方向性 専門用語や抽象概念を、県民一人ひとりの生活メリット(ベネフィット)に置き換えて発信する「政策翻訳」を徹底する。一方的な広報ではなく、生活実感に根ざした対話の場を設け、計画への納得感と参加意識を高める。</p>

カテゴリごとの分析 | コメントを5つのカテゴリに分類

カテゴリ	コメント概要
5. 生活防衛・基盤強化 (地域格差・防災・経済)	<p>キーワード: 鳥獣被害対策、防災・減災、地域格差是正、精神的ケア、GX(自然共生)、生活困窮支援</p> <p>概要: DXなどの先進的な取り組み以前に、クマ・イノシシ被害や災害への備え、山間部のインフラ格差といった「生存と生活の基盤」に対する危機感が示されています。また、精神疾患への偏見解消や貧困対策など、社会的に弱い立場にある人々への具体的かつ地道な支援(セーフティネット)を求める声が根強くあります。</p> <p>アップデートの方向性 未来への投資と並行して、県民の生命と財産を守るための防災・防犯・鳥獣対策へ重点的に予算配分を行う。地域資源(自然・温泉等)を活かしたローカルな経済循環GXを促し、誰もが安心して暮らせる土台を固める。</p>

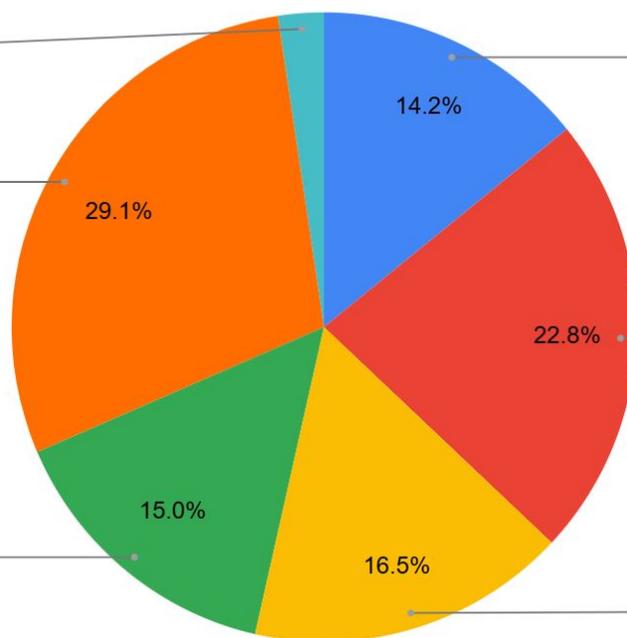
カテゴリごとの分析 | コメントを5つのカテゴリに分類

コメントのカテゴリ別分布

その他
2.4%

5. 生活防衛・基盤強化（地域格差・防災・経済）
29.1%

4. 県民対話・広報（計画へのフィードバック・認知）
15.0%



1. 秩序ある共生（多文化共生・治安）
14.2%

2. 移動の柔軟性（交通・インフラ）
22.8%

3. 若者定着・生活の質（子育て・魅力・働き方）
16.5%

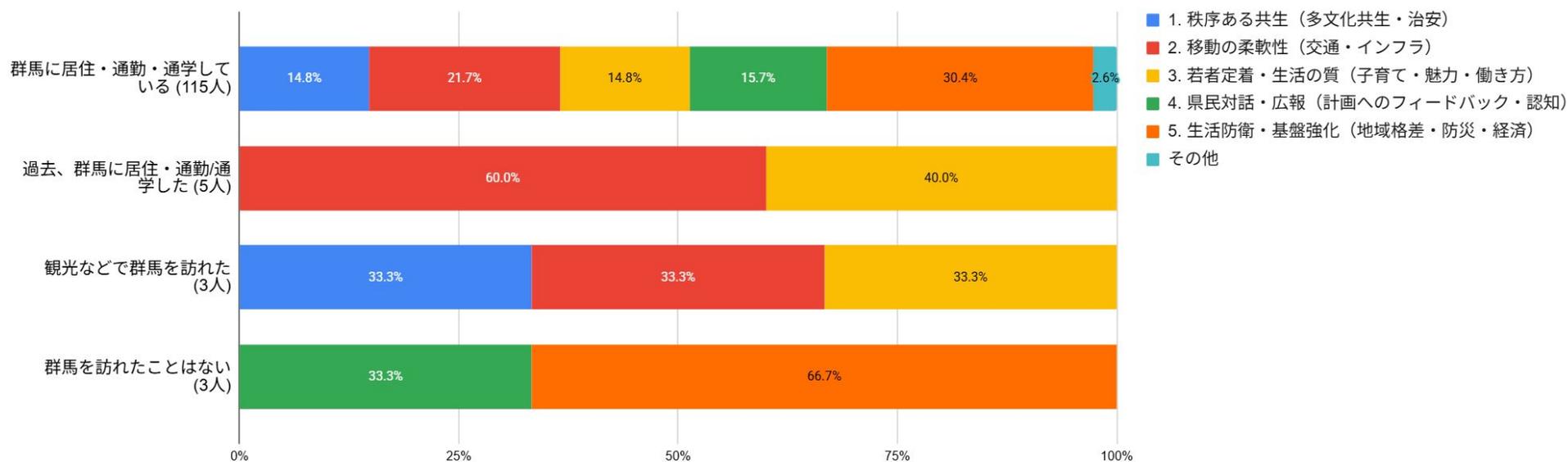
クロス分析と考察

カテゴリと属性のクロス分析 群馬県との関わり

「群馬との関わり×重点テーマ」で見ると、まず現住・通勤通学層(115人)は、関心の芯が生活防衛・基盤強化(30.4%)と移動の柔軟性(21.7%)に寄っており、将来像の議論以前に「暮らしを回す土台」「移動の不便」を先に改善して欲しい、という優先順位が見えます。一方で、秩序ある共生／若者定着／県民対話は15%前後で割れ、関心は分散しています。

回答数は少ないですが、過去居住層(5人)は移動(60%)＋若者定着(40%)に集中し、外に出た経験者ほど「移動と暮らしの魅力」がボトルネックとして立ち上がりやすい可能性があります。未訪問層(3人)は生活防衛(66.7%)と県民対話(33.3%)に偏り、政策以前に「自分ごと化の翻訳」が不足している印象です(N数が少ないのであくまで仮説ベース)

群馬県との関わり × のクロス集計

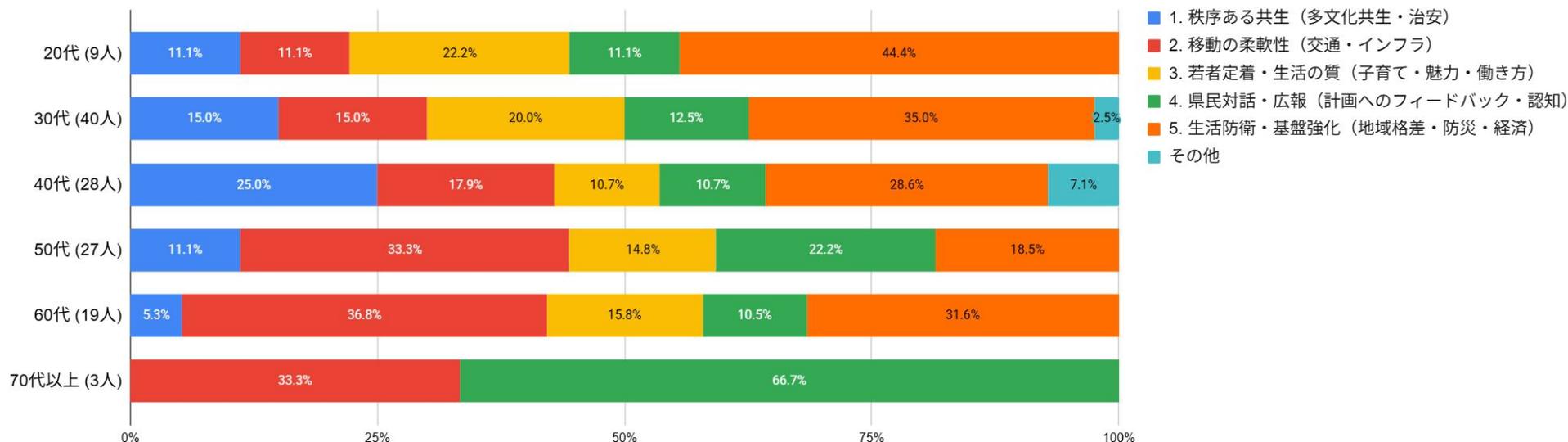


カテゴリと属性のクロス分析 年代

年代×重点テーマで見ると、20～40代は「生活防衛・基盤強化」が一貫して最大で、20代44.4%/30代35.0%/40代28.6%と「暮らしの不安を先に改善して欲しい」という観点が最も多くなっています。そのうえで 20～30代は「若者定着・生活の質」も2割前後(20代22.2%、30代20.0%)と相対的に高く、生活防衛とセットで将来の選択肢を問う構図です。40代は「秩序ある共生」25.0%が他年代より目立ち、生活基盤に加えて地域の安心・ルール側の論点も関心に上がっています。

一方、50～60代は関心の軸が「移動の柔軟性」へシフトし、50代33.3%/60代36.8%が最大。加えて生活防衛も60代31.6%と厚く、「移動できること＝生活の維持」に直結している読み取りができます。70代以上(n=3)は「県民対話・広報」66.7%が突出しており、施策そのもの以前に“伝わり方・参加のしやすさ・反映の実感”がボトルネックになっている可能性が高いです(※20代n=9、70代以上n=3はN数が少ないのであくまで仮説となります)。

年代 × のクロス集計

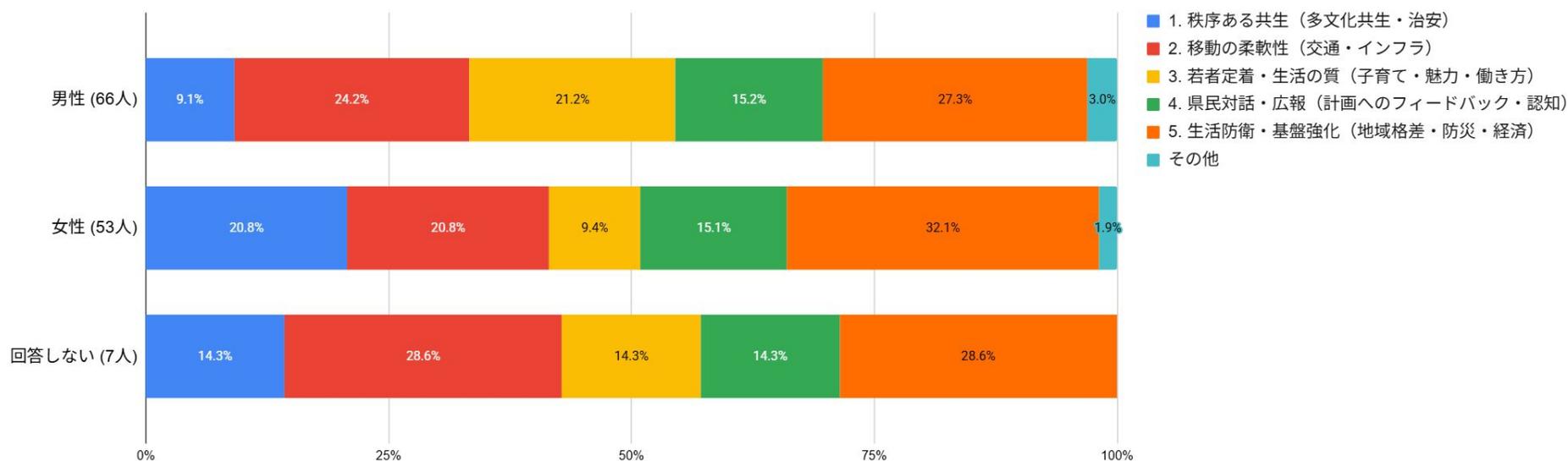


カテゴリと属性のクロス分析 性別

性別×重点テーマで見ると、大枠は男女で大きくはズれていません。どちらも上位は共通して、「生活防衛・基盤強化」が最大(男性27.3%、女性32.1%)、次いで「移動の柔軟性」が2割前後(男性24.2%、女性20.8%)で、「暮らし」と「移動」が入口になっています。

一方で、差が目立つ2点があります。男性は「若者定着・生活の質」21.2%が相対的に高く(女性9.4%)、女性は「秩序ある共生」20.8%が相対的に高い(男性9.1%)です。県民対話はほぼ同水準(男性15.2%、女性15.1%)となっています。

性別 × のクロス集計

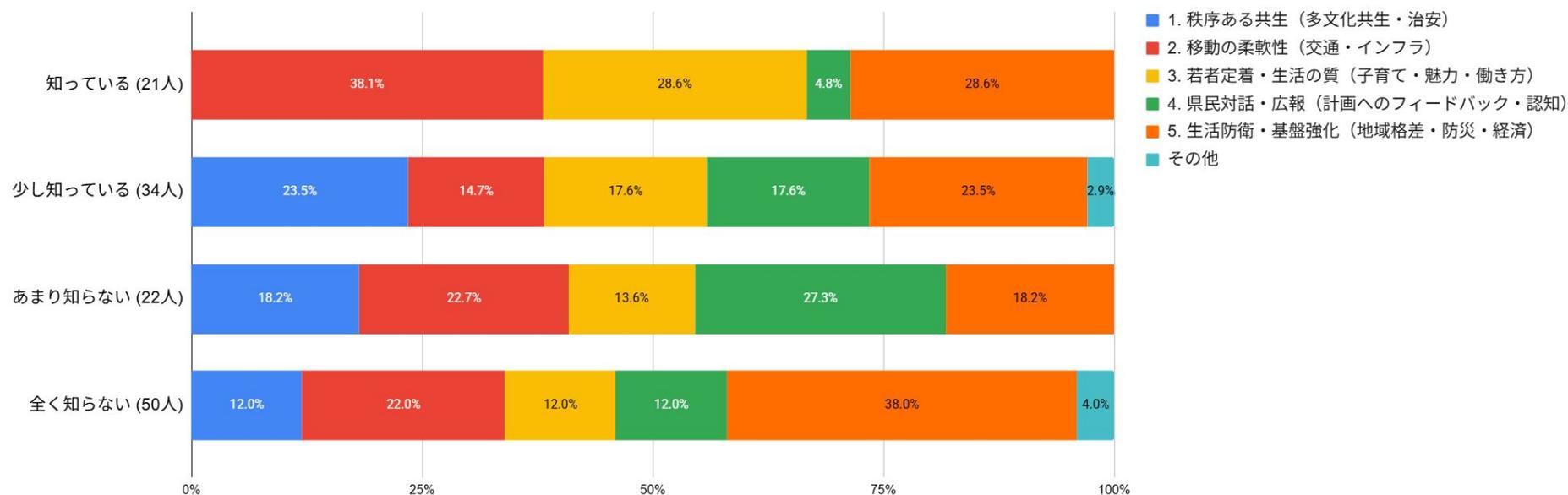


カテゴリと属性のクロス分析 計画の認知度

「新・群馬県総合計画の認知度 × 重点テーマ」で見ると、認知が高い層ほど政策の中身(移動／若者／生活基盤)に関心が収れんし、認知が低い層ほどまず生活防衛と伝わり方(県民対話・広報)が前面に出る構図が見えます。

具体には、「知っている(21人)」は移動38.1%が最大で、若者28.6%/生活防衛28.6%が並び、県民対話は4.8%と小さいです。一方、「全く知らない(50人)」は生活防衛38.0%が突出し、移動は22.0%程度に落ち着きます。また、「あまり知らない(22人)」では県民対話・広報が27.3%と相対的に高く、計画を知らないほど「まず分かりやすく届けてほしい/参加しやすくしてほしい」という需要が増える印象です。

新・群馬県総合計画を知っていますか? × のクロス集計



カテゴリごとの 代表的なコメント

1. 秩序ある共生（多文化共生・治安）

30代 男性

"移民問題については、これまでいた移住者とこれからの労働力対策の二つの側面で考えたい。

群馬は「甘楽郡」や「多野（多胡）郡」といった地名にもみられるように、もともと渡来人も多い地域だ。彼らがどのように地域と共生してきたのか歴史から学び取り入れられないか。また何十年も前から大泉町や太田市では外国人労働者に頼ってきた経緯があり、そこで得られた知見をもっと生かせないだろうか。

（中略）エッセンシャルワーカーとして働いてもらったり、オレオレ詐欺を止めたなどという良いニュースもある。（中略）悪いニュースについて問題は顕在化しているが、対策は先送りにされている印象がある。"

(※歴史的背景や過去の知見を活かすべきという冷静な分析)

30代 女性

"外国人が本当に多く、皆悪いことをしているわけではないのはわかっていますが、好き勝手やりすぎでは？と思う場面を見かけることが増えてきました。県として何かしら対策を講じてほしいと切に願っています。"

(※治安の悪化を危惧されてはいるものの、共生を目指し、県へのかじ取りを提言)

40代 回答しない

"外国人をひとくくりにはしてはいけないと思います。たくさん税金を払い、マナーも守って社会に貢献している外国籍の方々もいっぱいいらっしゃいます。むしろ、有名企業や群馬大学などでちゃんと働いている外国人の方々は、群馬県の民度も文化も高めてくださる素晴らしい方が多いです。でも、群馬県はそういうハイスキルな方々を県内にとどめておくことが苦手です。（中略）

受け入れ側の行政や学校が責任を持って毎日の生活に必要なマナーを教えていく責任があると思います。その責任が負えないのであれば、むやみに、お金や労働だけのために外国人を受け入れることには反対です。"

(※ハイスキル層の定着課題と、受け入れ側（行政・学校）の教育責任の明確化を提言)

2. 移動の柔軟性（交通・インフラ）

30代 女性

"デジタル技術が何も感じられない。

車社会の群馬県だからこそ、道路整備に力を入れていただきたいと思います。私が考える方法としては全信号機にAIを導入し、歩行者、自動車の混み具合で、点灯色を変更してほしいです。どんなに混んでいてもというリミットを入れるのと、人も車もない時はわざわざ変更する必要もないので、事前に設定を話し合えば良いかと思います。"

(※既存インフラの不便さを指摘しつつ、DX (AI信号機) による具体的な解決策を提案)

40代 女性

"車社会なのでそれを上手く活かす。

前橋の商店街、駅周辺の見直しなど

県庁所在地として活気のある街にして下さい。今あるいいところを伸ばしてほしい。変にいろいろ取り入れたり受けたりしないで。"

(※無理な脱クルマではなく、現状の車社会を前提とした都市機能の改善を要望)

50代 女性

"高齢になって車に乗れなくなった場合の生活が不安。例えば人気のスーパーやホームセンター、大型ショッピングセンター（イオンなど）などに定期的に連れて行ってくれるバスがあると良い。家にこもりきりだと認知症にもなってしまうそうなので。"

(※免許返納後の「買い物」や「社会参加」という具体的な生活不安と、商業施設直通バスなどのニーズ)

3. 若者定着・生活の質（子育て・魅力・働き方）

30代 男性

"クリエイティブ産業の活性化に力を入れてもらいたいです、ゲーム・アニメ会社などの補助金等を活用した積極的な誘致とアピール・クリエイターへの待遇改善。Gメッセという素晴らしい立地を持つコンベンションセンターを活用し、東京からだけではなく北陸などから積極的にクリエイティビティ・即売会のイベントへの参加を促して欲しいと思います。"

(※産業誘致だけでなく、即売会イベントなど「若者が楽しめる文化」の育成を提案)

40代 男性

"自然を推すのも大切ですが、それだけでは人が集まりません。人(特に若者)を集める大規模な遊園地や水族館、大規模プールなどの施設を建設や誘致をして、遊べる楽しい街づくりをしていかなければ、衰退の一途を辿るのみです。フラワーパークプラスもどんなに楽しい施設になるかと思いましたが、残念ながら、まあ中途半端な仕上がりだと思ってます。周りでは話題にすらなってません。まあ、魅力のある県では無いですね。"

(※「自然」だけでは若者は呼べない。「楽しさ・遊び場(都市的アメニティ)」の欠如が衰退原因であるという指摘)

50代 男性

"県レベルで副業を認め、個人が様々な職種で活躍、チャレンジできるワーク、ライフバランスと資産形成の実現。"

(※企業誘致だけでなく、個人の「働き方の自由度(副業解禁など)」を高めることが魅力になるという視点)

4. 県民対話・広報（計画へのフィードバック・認知）

30代 男性

"「官民共創コミュニティ」について官民で意見交換し、意見とそれに対するFBや結果が可視化されるといいと思います。私は公共に興味がありデジタルも使いこなせるほうなので（中略）書き込んだりします。でも多くの県民は依然として公共に興味が無いか、デジタルに疎く情報にアクセスできないか、その両方だと思います。そういった人たちから見たら、選ばれた一部のコミュニティが内輪で盛り上がっている風にしか見えないでしょう。"

(※デジタル弱者や無関心層との分断を指摘し、対話プロセスの可視化とオープン化を提案)

50代 女性

"始動人、官民共創の内容は具体的にも知っている。

他は聴き馴染みがない。

生活しているなかで具体的体験や情報に触れるリアルな機会をつくってほしい。定期的な報告なども発信をしてほしい"

(※単語だけが独り歩きしている現状に対し、生活の中での「リアルな体験」や「定期報告」を通じた実感づくりを要望)

70代以上 女性

"2040年の「目指す姿」の長文内容を初めて読んだ時、「遠くから見た包装紙」をイメージしました。とても綺麗で魅力的な外観、中身は何だろうと想像してみますが、見当はつきません。（中略）

中身が分かりやすければ、県民はその都度、意見を言えるようになります。つまり、自分事として具体的に参加する過程が続くということです。言い換えれば、2040年の「目指す姿」の群馬県も、具体的に自分達で創り上げた、実感できるのではないのでしょうか。"

(※美辞麗句（包装紙）ではなく、中身を具体的に提示することで初めて「参加」や「自分事化」が生まれるという本質的な指摘)

5. 生活防衛・基盤強化（地域格差・防災・経済）

30代 女性

"職場の方から群馬は良いところだって言われます。災害が少なく自然に囲まれていると。確かに良いと思います。でも蓋を開けてみたら本当に良いのでしょうか？

夫婦で1人子どもがいる私には風邪をひいて熱が出ても医者に行くお金がありません。子どもの食事のために親はおなかですいても我慢しなければならない現状がここにはあります。シングルマザーファザーへの支援だけでなく、夫婦でもキツイ生活をしている人がいることをもっとみて欲しいです。"

(※表面的な「住みよさ」の裏にある、深刻な貧困と医療アクセスの問題を提起)

40代 女性

"少子化が進みすぎて、山間部は動物被害もあり外で遊ぶ子供がいない。子供が安心して遊べる場所がほしい。(中略)熊の被害が深刻です。2040年と言わず今すぐ、クマ対策を強化していただきたいです。動物は大切に思いますが、被害を受ける前に正当防衛で駆除するしかないと思います。"

(※山間部の過疎化と、直近の生命の危機(鳥獣被害)への切実なSOS)

40代 男性

"すごいことをしようとしなくていいと思います。みんなが幸せになり、IT化が進んでいて、、、とかは一旦脇に置き、ITは先進的な県の成功を真似するだけとし、今住んでいる若い人がちゃんと将来に安心して暮らせる最低限を目指して欲しいです。

高齢者優先、車社会で環境に悪い、空き家だらけ、治安が悪い、とかいう問題を直し、実直に暮らすことを保証するだけで大分良いと思います。"

(※キラキラした未来(DX等)よりも、まずはマイナスをゼロにする「普通の暮らしの保証」を求める声)

全体考察

全体考察①

① 総合考察（県が描く未来 × 県民の想い）

新・群馬県総合計画は、「県民の幸福度向上」をミッションに据え、誰一人取り残さない**自立分散型の社会**を、バックキャストで実装していく構想です。

その中核に「快疎」や「始動人」「官民共創コミュニティ」といった“価値を生む仕組み”が置かれています。

一方、県民側の声は、計画の方向性そのものへの反対というよりも、**入口と優先順位**が違う印象です。先進的なDXや新概念以前に、災害・鳥獣・地域格差など「生存と生活の基盤」への危機感が強く、移動の不安、治安や公平性、若者が“群馬で暮らす理由”の不足、そして計画の言葉が伝わらない、自分ごと化できない、が主要論点として立ち上がっています。

アップデートは、「ビジョンの修正」よりも、実装順序の再設計も一案と考えられます。

比較軸	知事・総合計画	県民コメント傾向
時間軸	2040年の未来（バックキャスト思考）	今日の生活（インフレ、草刈り、明日の移動手段）
空間軸	グローバル・広域（地域外交、ベトナム、東京対抗）	ローカル・足元（自宅前の道路、近所の公園、ゴミ捨て場）
戦略性	攻め（デジタルクリエイティブ、稼ぐ力、始動人）	守り（治安維持、インフラ補修、貧困対策、公平性）
キーワード	「快疎」「始動人」「官民共創」 （概念的・革新的）	「知らない」「草ボーボー」「外国人怖い」 （具体的・実感的）

全体考察②

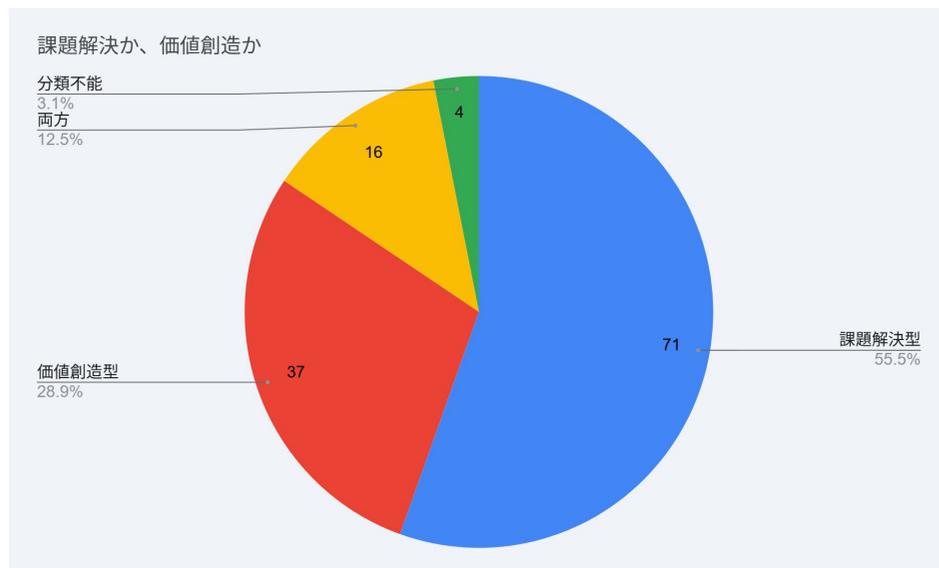
② 課題解決型と価値創造型で見た場合

課題解決を求めているのか、新しい価値創造を求めているか、という視点においても分析をいたしました。

課題解決型（マイナス→ゼロ）：約65件 — 圧倒的に多く、道路・交通インフラの劣化、治安悪化、公共交通の不足、子育て負担、高齢者の移動困難、医療・福祉の不足、外国人政策への不安など、「今ある問題を何とかしてほしい」という声が大半を占めます。

価値創造型（ゼロ→プラス）：約25件 — 新たなレジャー施設、デザイン教育、GX×DXの新概念、自然派ワイン産地構想、鉄道パーク、クリエイティブ産業誘致など、新しい価値や仕組みを生み出す提案です。

両方：約13件 — 企業誘致（価値創造）と子育て支援（課題解決）のように、両面を含むコメントです。



※前頁とも同様の結果となりますが、全体として、県民の関心は「まず足元の課題を解決してほしい」という方に大きく偏っており、新しい価値を生み出す構想よりも、今回のコメントの結果においては、日常生活の安心・安全・利便性の確保が強く求められていることがこちらからも確認できます。

全体考察③

③ 課題解決型と価値創造型の具体の分類例

課題解決型

1. 「今あるものが壊れている・足りない」という訴え

道路の舗装が剥がれている、路面表示が消えている、除草がされていない、公共交通が一時間に一本しかない—こうしたコメントは、本来あるべき水準に達していない現状を指摘しています。新しい何かを求めているのではなく、「普通の状態に戻してほしい」という声であるため、マイナスをゼロに戻す課題解決型と判断しました。

2. 「不安・困難・不公平」の解消を求めている

高齢者が車を手放せない不安、子育て世帯の経済的苦しさ、治安悪化への恐れ、医療アクセスの地域格差、外国人政策への不満—これらは現在進行形で感じている痛みや不安を「なくしてほしい」という要望です。幸福度を高めるといふより、まず苦しみを取り除いてほしいという性質のため、課題解決型としました。

3. 「計画や制度が機能していない」という指摘である

総合計画を知らない、構想の文言が抽象的で自分事を感じられない、広報が届いていない、関係機関が連携できていない—こうした声は、既存の行政の仕組みに穴や不備があることへの批判です。新しい価値を生み出す以前の「土台が整っていない」問題であるため、課題解決型に分類しました。

価値創造型

1. 「今ないものを新しくつくろう」という提案である

鉄道パークの建設、自然派ワインバレー構想、GDX（グリーンデジタルトランスフォーメーション）の概念提示、クリエイティブ産業の誘致—これらは現状の不備を直すのではなく、群馬にまだ存在しない産業・施設・概念を一から生み出そうとする提案です。ゼロからプラスを生む性質のため、価値創造型としました。

2. 「既存資源を組み合わせて新たな魅力を生む」発想である

温泉×ワインのリトリート、公共交通×医療福祉の連携モデル、DX×GXの融合によるウェルビーイング—これらは既にある群馬の資源を、これまでにない形で掛け合わせることで新しい価値を生もうとしています。問題の修繕ではなく「掛け算による創造」であるため、価値創造型と判断しました。

3. 「人や社会のあり方を変える」ビジョンを描いている

デザイン思考の教育、エージェンシーの協働による共生社会、思考力と想像力を育てる人材育成、多文化共生による多国籍企業集積—これらは個別の問題を解決するというより、県民の能力や社会の構造そのものをアップグレードしようとする構想です。現状維持の延長線上にない「ありたい姿」への志向であるため、価値創造型としました。

全体考察④

④ 令和6年度 県政重要課題に係る県民アンケート調査との比較

視点A 公共交通への不満は「声なき多数派」の問題

公共交通の不足と車社会への不満は、今回のコメントでも多数でした。「一時間に一本の電車」「高齢者が運転せざるを得ない」「トラムを通した栃木に置いていかれる」「脱・車社会」——約20件以上が交通問題に触れています。

定量調査はこれを強く裏付けています。 回答者の72.4% (2,171人) が「公共交通を日常的に利用していない」と回答し、これは自由記述で語られる不満が、声を上げた一部の人だけでなく、多数の県民に共通する構造的課題であることを示しています。

さらに、公共交通への切替に必要な改善として、「病院・商業施設へのアクセス」(41.4%)、「通勤通学での利用可能性」(36.3%)、「待ち時間の短縮」(35.5%)が上位に並んでいます。自由記述で高齢者の買い物バスや通院支援鉄道を求める声と一致します。

一方、県が推進するGunMaaS(グンマース)の認知度は低く、「聞いたことがない」が75.2%(2,257人)に達しています。自由記述でも「デジタル技術が何も感じられない」という声があり、デジタル交通施策が県民の実感に届いていない現状が、定量・定性の両面から確認できます。

含意：自由記述の交通問題への切実な声は、「不満を言語化できた少数」の背後に「同じ不満を抱える大多数のサイレントマジョリティ」がいることを定量調査が証明しています。

全体考察⑤

④ 令和6年度 県政重要課題に係る県民アンケート調査との比較

視点B コメントでは「制度」を語り、定量調査の「心の問題」

コメントでは道路、交通、移民政策、子育て支援など**制度・インフラ・政策**について具体的に語られていました。一方、アンケートでは自殺意識、相談へのためらい、環境への危機感など**個人の内面・心理**を定量化されていました。

自由記述では「鬱で死にたいが死ねない。希望を持てる群馬県であってほしい」「孤独で不安でなく居場所がある地域が必要」「精神疾患への偏見を取り除くイベントがほしい」といったコメントがありましたが、件数としては少数でした。

しかしながらアンケート調査を重ねると、3,000人中約半数が助けを求めることをためらい、6割以上が自殺を身近な問題と感じている。にもかかわらず、支援制度の認知度は極めて低かった。

含意：コメントの分類で課題解決型が多いのは、県民が「目に見える課題」を語りやすいためでもあると考えられます。アンケート調査は、言語化されにくい「見えない課題」が広範に存在することを示しているとも考えられます。

全体考察⑥

④ 令和6年度 県政重要課題に係る県民アンケート調査との比較

視点C 「価値創造」を望む声と「現状認知のギャップ」

コメントでは約23%が価値創造型の提案でした。GDXによるウェルビーイング、自然派ワインバレー構想、デザイン教育、鉄道パーク、クリエイティブ産業誘致など、新しい群馬の姿を描く意欲的な声です。

しかしながらアンケート調査は、「前向きなビジョン」が県民全体に浸透するにはまだ距離があることを示唆しています。

- インクルーシブ教育を「このアンケートで初めて聞いた」人が79.1% (2,372人)
- インクルーシブ教育に「興味がないし、必要とも思わない」が30.4%
- GunMaaSを「聞いたことがない」が75.2%

コメントでも「総合計画を知らなかった」「知りません」「知る方法も知らない」というコメントがあり、「構想の文言は綺麗な包装紙だが中身がわからない」という指摘が繰り返されました。

価値創造型の提案をできる県民は、情報感度が高く、課題を構造的に捉えられる「少数」であるとも考えられます。

一方で、乗り放題サービスについては「条件次第で利用したい」が50.3%、「利用したい」が11.6%、「ぜひ利用したい」が7.6%と、具体的で生活に直結するサービスには前向きな反応が見られます。これは「抽象的なビジョン」より「具体的な生活改善」のほうが県民を動かしやすいことを示唆します。

含意：価値創造型の提案は重要ですが、アンケート調査からは、足元の課題解決と認知向上を土台にする必要があります。自由記述で課題解決型が約6割を占めたのは、県民の感覚として「まだプラスを語る段階ではない」という実感の表れで、定量調査の認知度の低さがそれを裏付けているとも言えます。

全体考察⑦ 結び

① 認知の基盤づくりの重要性

県民調査ではGunMaaSの75%が「聞いたことがない」、インクルーシブ教育の79%が「初めて聞いた」。コメントでも「総合計画を知らなかった」「包装紙は綺麗だが中身がわからない」という声が複数ありました。ビジョンの言葉を磨くよりも、既存施策の「見える化」と「体感できる接点」を増やすことも一案と考えます。

② 「快疎」のアップデート

「快疎」はコロナ禍で「密」が忌避された文脈から生まれた概念ですが、「快疎にピンとこない」「公共交通が生きている地方都市と比べて勝ち目はあるのか」という指摘があり、調査でも72.4%が公共交通を日常利用していません。「密でないことの快適さ」から「疎であっても不便でないことの安心感」へ意味を広げ、移動手段の確保をもっと前面に出すことで、県民の実感と接続できるのではないのでしょうか。

③ 「始動人」の射程を生活者にまで広げる考え方

「始動人」は教育イノベーションの文脈で語られていますが、副業を始めた人、地域活動に参加したようなこうした「小さな始動」も明示的に評価・可視化することで、「誰もがかけらを持っている」という理念が初めて実感を伴って届くとも考えます。

④ 進捗の「見せ方」を検討

ロードマップは合理的に設計されていますが、県民には「7つ全部が同時に並んでいて、どこから手をつけているのかわからない」という印象を与えやすい構造です。柱ごとに「今ここ」を示す発信があれば、計画の内容を変えなくても、県民が自分事として受け止める回路が生まれるとも考えられます。

PoliPoli Gov